

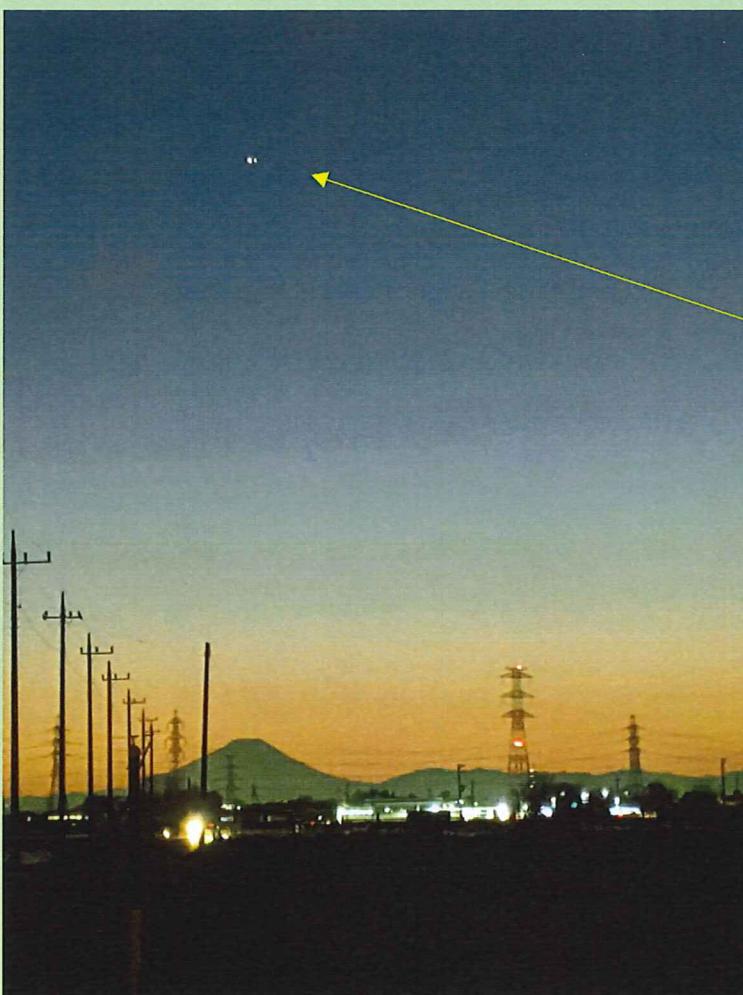


マザアスニュース

ひだまり

MOTHERTH NURSINGHOME FOR THE AGED

そこに 笑顔あふれる あなたの 居場所



みなさまご覧になりましたか。

2020年12月中旬から下旬にかけて、夕方の南西の空で木星と土星が大接近して見えました。肉眼でも観察できました。最接近する21日前後には月の見かけの直径よりも近づく「超大接近」となりました。今回ほどの接近は約400年ぶり、非常にレアな現象です。2020年12月の木星と土星は、夕方から宵の早い時間帯に南西の低空に見えました。2つ並んだ天体のうち、明るいほうが木星です。

今回はコロナ禍なので、リモートワークについて考えてみました。

IT、ICT、IoTの活用は、このコロナ禍で、呼ばれてから久しい。しかし、この活用を十分に生かせない職域の人たちのことを考えてみました。

公務員 公務員の多くがテレワークへの移行は厳しいと言われています
医療・介護職 医療・介護職はテレワーク化が難しいのが現状
接客業
清算・製造業
テレワーク化がすべてではない事務職
デザイン・ライター・エンジニア
営業職



などでしょうか。介護職もその一つです。実際に、新型コロナを踏まえたICT活用の状況調査などを見ますと、恒常的な在宅勤務の導入などは、わずか9%、利用者への支援は28%となっています。十分なケアができる日の早く来ることを願わずにいられません。

編集後記：ポーランドと日本の関係を語るとき、すぐに思い浮かべるのは「杉原千畝領事代理による「命のビザ」発給」や「コルベ神父とゼノ修道士」だろう。でも「ポーランド人シベリア孤児」のことはどれだけ知っているのだろう。1920年代初頭、ロシア革命直後の混乱の中で親を失ったシベリアのポーランド人孤児達（政治犯等で流刑となっていたポーランド人の子弟）は、飢餓と疫病の中で悲惨な状態にあった。これら765名のシベリア孤児（1~16歳）を1920年と1922年の2度にわたり日本政府・日本赤十字が受け入れ、その後祖国ポーランドに移送した。100年前の話だが、その子孫の一人は、これは「今の問題だ」と話す。「戦争などで言葉も文化も違う国に逃れる人は多い。困った人たちを助けるという普遍的な価値の大切さをこの出来事が物語っているから」と。日本に夢を描いて来日している多くの技能実習生のことを思わないではいられない。（草野）

「マザアスの歩み」シリーズ②/⑥

6回シリーズの2回目です。初回は、収入も措置費から介護度でランク付けされた料金が保険から支払われるようになり、収支差額は伸びず、労働力不足が深刻に、しかし、誠実に対応するならば、その先に経営が成り立つことを信じて歩みを続けるのが社会福祉法人ではないだろうか、と。夢を抱きつつ、さて、今回は・・・。

先駆性

理事長 高原敏夫

残念ながら「グループホームたきやま」は、諸事情により閉鎖に向けて準備中であるが、素晴らしい足跡を残してきた。開設は平成11年12月、東京都のモデル事業として、東久留米市から事業委託された事業であった。市内では初の試みであり、介護保険制度がスタートする前のことでもあった。何ごとも最初であり、他に同業者をなかなか見出せない時に事業構築は勇気のいることである。20年余りの歩みは糸余曲折様々な困難に遭遇してきた。

最大の課題はサービスの質と経済のバランス、即ち職員配置にあったように思える。

しかし、認知症のご本人やご家族にとっては、9人と職員が家族となって生活することは理想的な形態であることを確信できた。

法人としては、他に東久留米市に「ひかわだい」日野市に「たまだいら」小平市に「おがわ」新宿区に「つつじ」と次々にグループホームの開設が進んできたのである。

「たきやま」の流れは大切にして、発展的解消という方向で進めていきたいと努力中ということにしたい。

内容は異なるが、新宿の地域密着型複合施設は特別養護老人ホーム、小規模多機能ホーム、グループホーム、ショートステイの複合で、東京都23区内の先駆けとなった取り組みであった。

このプロジェクトは公募から始まったが、平成22年から10余年、「たきやま」と同じような課題を抱えながら、歩みを続けている。しかし、今や都内でも地域密着型サービス提供事業者の公募は数多く見られるようになってきたことをみると、地域のニードには高いものがあるようだ。

社会福祉法人は地域社会の福祉向上に寄与する為にあり、前に進めるための大切な理念に創造性、開拓性、継続性等に加えて先駆性を發揮して地域住民の期待に応えるように言われている。

この先駆性の言葉はボランティア活動を語るときに多く用いられるが、社会福祉法人の運営でも大切にしなければならない内容でしょう。

しかし、経営を考えると後から安全策を考慮しながら、追いかける方が楽な歩みではある。

それでも「たきやま」以来の職員皆で努力してきたことを無駄にしないためにも、法人として、今後も大切にしなければならない姿勢であろう。

マザアス東久留米から

マザアス東久留米では新型コロナウィルスが拡大し始めた昨年3月から、ご利用者の普段のご様子、笑顔などをご家族に届けたいと思いインスタを始めました。マザアスでの日常を切り取った場面のなかには、ホッコリする瞬間がたくさんあります。インスタへの投稿を続けていくなかで、私たちにとっていろいろな発見がありました。何といってもご家族がよくインスタを見てくださっているということです。ご家族に電話をかけたときに「インスタの写真みたよ!」「遠くにいる親戚もインスタ見て喜んでいるよ」などの反応を多くいただきます。お近くにすんでいない親族間の間で、ご利用者の状況を共有するツールとしてインスタを使正在することも。また私たちが他県の施設さんとつながったりすることもあります。インスタを始めてから、令和3年3月時点で157投稿、

フォロワーは300人を超えていました。
ちょっと時間が空いた時に、どうぞぞいてみてください!!



マザアス日野から

マザアス日野では、オンライン面会やオンラインケース会議をご希望に応じて行っておりますが、初めての試みとして、事業計画実践報告会についても一部オンラインで行ってみました。事業計画実践報告会は、施設内の各部署が事業計画として1年取り組んだことの内容や成果等を発表し、施設内各部署の相互理解や取り組みの水平展開、職員のモチベーション維持等、様々な目的を持つ機会としています。従来は、施設職員の他、理事長や常務、時には外部の学識経験者の方にお出で頂き、講評等の



ご意見を頂いていました。今回は、オンラインということで、施設職員は密を避けた状態で集合型とし、オンラインによりマザアス東久留米、ジャーローム東久留米にもご参加いただき、それぞれ1題のご報告をいただきました。また、理事長をはじめ外部理事の方にもオンラインでご参加いただき、各報告をお聞き頂きました。

そして、更にゲストとして、報告の中で登場する利用者さんご家族にもご参加いただき、取り組みに対する感想等も頂くことができました。初めての取り組みにしては非常に盛況でしたが、とても良い報告会になりました。



マザアス新宿から

今年の雛祭りの飾りつけは、新型コロナウィルス感染拡大防止のため、ボランティアさんにお願いできず、1階の地域交流スペースをにぎわすことができませんでした。そのような中で、特養では各ユニットでこじんまりではありますが、雛人形やタペストリーを飾り、それぞれのお雛祭りを楽しみました。また、2月の末には、ユニットでフラワー アレンジメントをご利用の方々とスタッフで楽しみました。皆さん、



思い思いにお花を活けて、笑顔がはじけました。雛祭りやフラワー アレンジメントの様子を写真に収め、お手紙を添えてご家族に送りました。面会が出来ない今、ご家族の方々に少しでも施設中のご利用者様のご様子がわかっていただければ、と思っています。感染を防止するべく、今はユニットのスタッフがそれぞれ趣向を凝らし、ご利用者の皆様に笑顔が増えるように頑張っています。

担当（小松）ボランティアコーディネーター

